

宋拓館本十七帖

沈塘藏帖

上波清晏平昔又江
出有以故是名受

且山川形勢乃亦何可

不致白

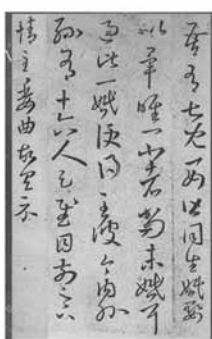
「落ち穂拾い記」⑥5

【館本十七帖】・③『欠十七行本十七帖』

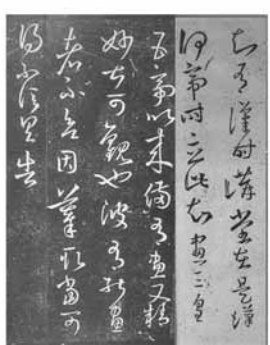


図①『欠十七行本十七帖』の巻末「勅」と題記

図② 児女帖



図② 講堂帖 漢時帖

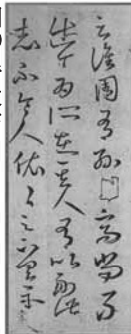


「三井本」「欠十七行本」

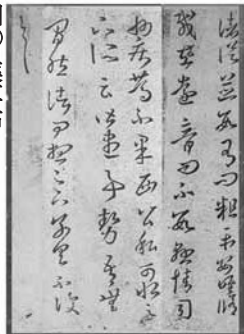


図③ 二種の書風比較

図② 譙周帖



図② 諸從帖



図② 葉草帖



図⑤『吳継仕藏本十七帖』



図⑥『文徵明朱積本十七帖』



図⑦『唐搨十七帖』



「館本十七帖」の館本とは、唐時代の皇族の子弟を教育する弘文館で用いられた法帖であることを意味する。巻末に大きな草書の「勅」字の下に小楷で、「付直弘文館臣解無畏充館本、臣褚遂良校無失、僧權」とあり、褚遂良が校定したと記されている(図①)。先に紹介した三井本も館本の一種であり同様の「勅」字等の文字が付されている。今回は、日本でも江戸時代に将来されていた「欠十七行本十七帖」を取り上げた。館本に属するが、タイトルが示すように、普通の館本に比して十七行分が欠けている。図版②に文字を反転して示したように「児女帖」「五行」「譙周帖」「三行」「講堂帖」「二行」「諸從帖」「六行」「葉草帖」「一行」の十七行分が足りない。「欠十七行本」の特徴は、他の館本と異なり書風が、やや滑らかにして伸びやかである(図③)。明時代の『余清齋帖』等の集帖にも収録されている。日本では戦前、書道博物館主の中村不折翁が、小型の折帖装で「欠十七行原本十七帖」と題され、自ら出版されたのが有名である(図④)。今回は、この書道博物館本と同石拓の家藏本を主図版とした。清末の金石家・寶熙(1871~1942、字は仲明、瑞臣、沈齋、頑山居士などと号す)の通蔵を経た旧拓本である。「清晏帖」の全体を示した。近年、京都国立博物館所蔵の上野本と同石拓とされる拓調が優れた上海図書館所蔵の『吳継仕藏本十七帖』(図⑤)や『文徵明朱積本十七帖』(図⑥)がカラーで精印され、更にこの帖石の一部が発見されている。また開封博物館所蔵の明晋府旧蔵とされる「唐搨十七帖」は、戦前に不鮮明な影印が刊行されていたが、最近原装のカラー精印本が出された(図⑦)。ともに十七帖研究には、欠くべからざる重要な法帖である。

伊藤滋(書齋名・木鶏室)



図④『欠十七行原本拓十七帖』



書のひろば

理事長 下谷 洋子

第76回毎日書道展 事務局会議開催

4月8日(火)、如水会館にて第76回毎日書道展の事務局合同会議が開かれました。2月の運営委員会にて大綱が決まり、いよいよ76回展が開始します。コロナ禍以降今回も各部の部長・副部長、主任クラスの先生方に出席して頂き、全体会議の後各部に分かれて打ち合わせをしました。これまで、5月鑑別6月審査でしたが、来年からは5月に一体化されることになる予定です。本院からは、当番審査員と共に事務局員も多数関わっていますので、よろしくお願いいたします。

毎日理事小委員会開催

事務局合同会議後、同会館で理事小委員会が開かれました。

- 1.令和6年度収支決算案について
- 2.毎日書道展改革の三者協議について

3.関西万博での毎日新聞社主催の書道イベントについて

4.第76回毎日書道展について

東京展では国立新美術館で、次のようなイベントが計画されています。

- 会員賞受賞者による席上揮毫会
- 毎日賞受賞作品解説

★毎日書道会理事・監事によるギャラリートーク

★毎日書道図書館連携企画「拓本をとってみよう」

★「書の甲子園」作品展示に伴う学校連携企画

『毎日展作家と書を学ぼう(仮称)』
(★印 新企画)

日程など詳細は後日掲載します。

真下京子先生近作展を開催

毎日書道展審査員で本院参与の前衛作家真下京子先生が、4月13日(日)から18日(金)まで表参道ギャラリーコンセプト21にて近作展「心音」を開催しました。4×4尺など12点に小品を交えて、『書と絵画の臨界(本人曰く)』を問い続けている先生の知的な書の象が披露されました。本院の前衛作家のなかでも長年独自の抽象芸術の世界を追求されてきた先生の新たな試みでした。

特別昇段級試験実施

本誌の春季昇段級試験の審査が4月

23・24日と事務所にて実施されました。春は、漢字条幅とかな半紙の三種があります。三種は秀級以上から師範を目指す方に資格がありますが、年1回のみのチャンスです。上段にいきますと、現級留め置き制度もあり、何度も挑戦することにもなります。師範に合格しても、書はそれで何でも通用するわけではありませんが、一つのステップの目安になります。結果の総評詳細は6月号の本誌に掲載されますが、残念な結果になられた方は、また一年、しっかりと、勉強されて備えて下さい。受験の時期だけでなく、一日一日の地道な努力でしか解決しないでしょう。



早朝からの審査会風景

平安書道研究会のご案内

(一・社)書芸文化院は昭和25年から平安書道研究会を主宰し、70年余、月1回の開催を続けています。

歴史ある平安書道研究会の最大の見どころは創立者飯島春先生の春敬記念文庫所蔵の「古筆展示」です。春敬先生が蒐集した100点に及ぶコレクションの中から毎回数点の古筆を、参加者は直に鑑賞出来ます。

また、客員講師による「古筆研究の講座」、毎日展かな部審査員による「臨書講座」も受講できます。かなの専門を目指す方だけでなく、書を学ぶ人は日本文化の知識としては是非ご参加されては如何ですか。

客員講師

池田和臣・笠嶋忠幸・高木厚人
名児耶明・四辻秀紀 各氏

2025年の受講生は現在募集中です。

問い合わせ 書芸文化院

TEL 03・5281・0717
FAX 03・3233・2890

漢字書基礎基本講座 (12)

種谷萬城

蜀素帖卷頭部分



蜀素帖「洞庭帆玉破」



蜀素帖の臨書

「洞庭帆玉破」



蜀素帖の倣書「巧妙自在」



行書4 蜀素帖

宋代になると、能力第一の官僚選抜制度が行われ、貴族社会が崩壊し、士大夫と呼ばれる知識階級が急成長した。書の趣きにも学識が反映され、書家の意趣を重視した、個性的な行草書が出現した。米芾(1051~1107年)(字・元章)は、蘇軾(字・東坡)、黄庭堅(字・山谷)とともに北宋の三大家に数えられる。書の鑑識を善くし、名跡を收藏した米芾は、特に王羲之・王献之を始めとする晋唐書法の探求者で、晋唐名跡の臨模に明け暮れ、その造詣を根底に、個性豊かな独自の書風を打ち立てた。

台北故宫博物院蔵の『蜀素帖』は、元祐三年(1088)、米芾38歳の時、湖州(浙江省)の知事・林希の招きでその任地に遊んだ折、烏絲欄が施された蜀素(四川省の白絹)に書かれた自作の詩巻。線は澄みきって、颯爽としているが、抑揚が激しく、躍動感に溢れる巧妙な筆法で、大小、太細、長短の変化に富み、参差錯落(不揃い)の趣きに富んだ魅力的な行書の名品。蜀素帖の臨書と倣書を通して、表情豊かで、多彩な変化に富んだ筆法の妙味を学びたい。

※YouTube『筆のサロン』に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非参考にしてください。QRコードでアクセスできます。



基礎基本講座

篆刻・刻字基礎基本講座 (12)

後藤大峰

前回、前々回と印泥のことについて、お話をさせて頂きました。今回は、他の用具について、お話を進めて行きたいと思います。篆刻用具で真っ先に必要なものとして挙げられるのが以前、お話をさせて頂きました「印材」です。次に「印刀」。「印泥」の順でしょうか。

その他、必要欠くべからざる用具がございます。まず、印材に印泥を塗布して用紙に写し取る際、確実に転写できるように用紙の下に敷く「印褥」があります。

写真のようなものから、いわゆる、「板バレン」等があります。また、それらが無いときは、厚紙を何枚か重ねても代用はきます。このように身近な物でも充分かもしません。しかしながらやはり「用具」としてキチンとしたものは、一つ、用意なさった方が良いでしょう。

次に、是非必要なのが「印矩」でしょうか？

これは用紙に出来上がった作品(印材)の位置決めを行う際、絶対必要です。形としては「T字形」、「L字形」等、何種類かあります。

筆者は、扱いやすいのは「T字形」ではないかと思っています。

これは各人の好みですから、ご自身に合ったものをお使い頂いて良いと思います。

各用具は様々ありますが最後は、やはり、ご自身に合ったものを見つけてみて下さい。

それが一番良いと思います。



印褥 (いんじょく)



印矩 (いんく)

篆刻作品を創るに当って必要な用具について何回かに分けて、お話をさせて頂きました。次回からは、刻字についての基礎基本のお話を分かりやすく進めて行きたいと存じます。

書道芸術院

令和の群像 (2025)



中瀬美知

「初心にもどり楽しむ」

仕事からも解放され、最近ようやくく自分自身を見つめ直すゆとりが出てきて、この頃、筆を持っているときが楽しい、面白いと感じることがある。この気持ちの変化は、今思い起こしてみれば、若い頃感じた気持ちでもあることに気づき、今は懐かしさを覚えている。

書道を始めたばかりで、浜谷芳仙先生に本格的に書道の教えを請い始めた頃、前衛書道の研修会に何回か参加した。そこで中島邑水先生や深松海月先生に「素直な表現、欲のない線質」と認めていただき、何がよいのか自分でも全く分からず首をかしげていた記憶がある。たぶん真に素晴らしき作品という意味で誉められたのではなく、歩き始めたばかりの幼な子が必死でようやく歩きをしている様と重ね合わせ、若さゆえの素朴さを認めてくださったのだと思われる。単純な私は作品を書くのが楽しくてしやうがなかったのを覚えている。しかし、その後はだんだん書の道の奥深さを知るようになり、こんな風にかきたいという欲が出てきて、満足に書けない自分に直面する

ようになってきた。

たぶんこの年になって、また少しずつだが、楽しさや面白さを感じるようになってきたのは、年を重ねるにつれ、自分の無能さの中にもまずは自分が楽しまなければやっている意味がないと思うようになってきたからであろう。さらに、

上手く書きたいという気持ちよりは自分の心が線質に自然に表れてくることに面白さを見い出すようになってきたからかもしれない。

私は最近の課題として、作品制作に取り組むときには、その時々自分の心に大きく感じていることを題材にするよう第一に考えている。ここに掲載した作品は、百歳まで生きたいと願っていた父への感謝の気持ちを作品に表現したものである。このようにそのときの心の叫びや情感を意識して筆を持つと、自分

の心にすがすがしさを感じる。この作品では、2メートル四方の大きな紙面に、作品に向かう自分の思いや願いを筆に託し、紙に切り込む激しい線、速度、直と曲、全体のバランス、余韻の残る終筆の出し方等、自分なりに工夫してみた。

最近になり、私は長年、書の修練をおろそかにしてきたため、基本ができていないのを痛感している。今はまだまだ書の道を極める通過点だが、古典の習得という基本に戻り、少しずつ日々努力を積んでいきたいと願っている。



「百歳」

中瀬美知書

書道芸術院

令和の群像 (2025)



第75回毎日書道展「秋櫻子の句」

天野白扇書



天野白扇

「書の道について」 (師の導き)

書を長く続けてこられた理由は。新聞のインタビューに：「書が好きだから。」一見単純でシンプルな言葉が、深くそして暖かく、私の胸の奥に灯火として宿っている。これは師が残してくれた大切な言葉である。

——素晴らしい作品とは——

どのような作品が真に素晴らしいのか、人それぞれであると思うが、絶対観念とは、その人その人の中に存在するもので、人生そのままだが反映されるものであると思う。また、生まれ持った感性もそうであると思う。それは決して日の当たる陽の部分だけではなく、心の奥底に潜む闇の部分でもあると思う。言い替えば、その人の人生の苦しいことも、うれしいことも全ての経験が血や肉となり作品に宿り形成されていくのだと思う。その心の奥にあるものを具象化することができれば、作品は良いものになるのではないか。魂の宿った上辺だけではない真に深みのある作品になると考える。技術をひけらかすような浅い線質ではなく、たとえ拙くても心を抉るような深い深い線を引きたいと願っている。

——余白とリズムについて——

作品は言うまでもなく余白とリズムが大切であると思う。一貫した心地良いリズム、迷いのない滞ることのない流れ、頭で考えるのではなく自然に生まれるものであると思う。そこから構成ができあがり、白と黒の、のびきならない関係や強弱が生まれてくる。また、余白は作品の命であると思う。白(余白)をいかに輝かせるか。そのためだけに黒を置いて行く。紙に筆を下ろした瞬間に白が輝き、引き締まった空気が流れる。余白が語り掛けてくる作品をいつか書けたらと思っている。

——生活の中にこそ作品は生まれる——

私が作品製作に充てる時間について悩んでいた頃、師から「生活の中から作品は生まれてくる」という言葉を頂いた。優しく穏やかな口調が今も私の中にある。作品は作るものではなく生まれてくるものだ。

——幸せな歩み——

人が生きるということは何かに向かって歩んで行くことだと思う。それが私にとって書である。日常生活の大部分の時間を傾けてこられた書道に出会うことができて幸せである。この先も終わりのないこの道を一步一步噛み締めながら歩んで行きたいと思う。

新 鋭 礼 讃

現代詩文書部 審査会員候補 菊池秀蓮（大阪府）



所属 関西書道協会 参加している書展
師名 山崎掃雪 毎日書道展
小出花雪



「松本恭子の句」

冬の孔雀 スカーフの冬の孔雀を束ねけり



所属 華祥社
師名 安藤華祥

漢字部 審査会員候補

佐茂明祥（宮城県）

参加している書展
毎日書道展
河北書道展



「禅語」

一華開五葉

作品自評

今回は「スカーフ」や「孔雀」など華やかな雰囲気が入り松本恭子の句を選びました。

墨は怖がらずに思い切りよく書きなさいという小出先生からの教えを忘れず、墨色や字形、文字の配置などを考慮しながら雀の字を羽を広げた孔雀のイメージで書き、下部のパーツが弱くならないように仕上げたつもりです。淡墨は乾くまで全体のイメージがわからず、せっかちな私は毎回苦戦し、今回も納得の出来とは言えませんが、なんとかまとめられたかなと思います。

書活動における課題

現在は5歳と2歳の育児と仕事や家事

作品自評

「一華開五葉（一つの花が5枚の見事な花びらを開き、やがてそれが立派に結実する）。この禅語の意味の一つに、忍耐強く努力することがやがて成就するとあり、現在の状況を表しているかのようにだったので、今回の題材としました。

書体は初心に帰る意味も込め、書歴の中で長く書いている行草体を選択し、潤渾・疎密・余白を意識して作品制作に取り組みました。筆も羊毛中筆から試行錯誤し、細い筆と合わせて2本で書いてみました。細い筆と合わせて2本で書いてみた作品となりました。柔らかさと潤渾のバランスの取れた作品ができればと思います。

に追われる毎日、集中して書道と向き合い作品制作をする時間が取れないこと。なかなか成長を感じられず情けなさを感じますが、自分の不甲斐なさや向き合いながら書道家としても人間としても自己研鑽に励みたいのです。

今、伝えたいこと

幼稚園の年長さんの時に母に勧められて始めたのが書道でした。何の取り柄もない私がこれまで続けてこられたのは、素晴らしい先生方や仲間に出会えた幸運と家族の理解あつてこそです。支えてくれる家族に感謝の気持ちを忘れず、これから自分らしい作品作りに取り組み精進していくことが恩返しになればいいなと思います。

書活動における課題

現在の最大の課題は、作品を仕上げていざ会場に飾ってみると、迫力に欠けていることがあるというものです。華祥先生からも、まとまり過ぎていて時があると言われ、この殻を破ることができれば、さらに広い景色が見えると思っています。今、伝えたいこと

この作品を制作している際に、イチロー氏の日米野球殿堂入りというニュースが入ってきました。満票まで1票足りなかったことについてのコメントで、自分なりの完璧を追い求めて進んで行くのが人生というところが心に刺さりました。足りないものばかりですが、自分の書を追い求めて、精進してまいります。

第78回 書道芸術院展〈2〉

(併催 第76回全国学生書道展)

実行委員長

小竹 石 雲

第78回書道芸術院展(併催、第76回全国学生書道展)については、令和6年3月10日に開催された理事会において、その大綱が次のように決定された。(その後の理事会において変更等を承認)

○第78回書道芸術院展

1会期 令和7年2月5日(水)
2月11日(火)・(祝)

2会場・東京都美術館(上野公園内)

3募集規定

・無鑑査、一般公募の部

・作品・書類搬入

令和6年11月26日

・鑑別・審査

令和6年12月7日・残務8日

イ審査会員、審査会員候補の部

・書類搬入 令和7年1月17日

・作品搬入 令和7年1月27日

ウ審査

・審査会員候補

令和7年1月28日

・審査会員 令和7年1月29日

4作品解説会(都美術館)

令和7年2月9・11日

5学生展表彰式(上野精養軒)

令和7年2月8日

6一般表彰式(上野精養軒)

令和7年2月8日

7祝賀懇親会(上野精養軒)

令和7年2月8日

8出品作品サイズ(単位:cm)

(1)財団理事・監事

A 91×242 B 152×152

C 121×182

(2)財団評議員・参事・審査会員

D 61×242 E 79×182

F 85×176 G 106×136

H 121×121

(3)審査会員候補

I 61×182 J 73×152

K 91×121 L 105×105

(4)無鑑査

M 46×167 N 86×86

(5)一般公募

O 35×136 P 25×167

Q 65×86

篆刻作品

R 30×39

刻字作品

S 51×61 T 30×91

U 35×67.5

9一般公募出品料

(1)30歳以上 700円

(2)30歳未満および70歳以上 3000円

(令和7年1月1日現在)

10運営委員会

○運営委員長 下谷洋子

○運営委員

小竹石雲 後藤大峰
千葉蒼玄 飯沼恵鳳
稲垣小燕 川島舟錦
北村白琉 小林琴水
坂本素雪 高田幽玄
種谷萬城 津田海仙
名越蒼竹 半田藤扇
平川峰子 山口仙草
田村鄭雲 西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

小竹石雲 千葉蒼玄
後藤大峰 飯沼恵鳳
川島舟錦 小林琴水
高田幽玄 津田海仙
半田藤扇 山口仙草
西川翠嵐

○第76回全国学生書道展

1募集規定

ア出品資格

第1部 幼児、小学生

第2部 中学生

第3部 高校生

第4部 大学生、専門学校生

イ部門 ①半紙の部 ②半切1/2の部

両部門に出品できる。

ウ作品受付 令和6年10月23日

エ審査 令和6年10月30日

才褒賞 A個人賞 11月4日

B団体賞

2学生展表彰式(上野精養軒)

令和7年2月8日

3運営委員会

運営委員長 下谷洋子

以下実行委員長、実行副委員長、

陳列部長、会計部長、事務局長、

事務局次長は院展、学生展共通。

総務部長 藤村昌子

審査部長 半田藤扇

表彰部長 倉林紅瑠

揮毫部長 大平邑峰

4審査役員

A賞審査員(6名)

A賞選考委員(9名)

中央審査員(17名)

5指導者作品展示(142点)

ア出品資格

・本展出品指導者

・「書道芸術学生版」指導者

・書道芸術院審査会員

イ作品寸法

・半紙額内自由

○運営委員会

第78回書道芸術院展運営委員会を

令和6年6月23日の理事会に合わせ

て行った。

*審査会員の作品について

〈褒賞〉

書道芸術院春華賞(1名)

選考は運営委員会(財団理事・監事)

が担当。(名誉会員、参与会員、選

考委員、参事で過去の理事・監事経験者、過年度受賞者は対象外）
春華賞候補作品には赤シールを添付し公表した。今回より理事・監事の代表者による注目作を選出し、今までの「評論家の眼」に加えて祝賀懇親会の場で紹介した。

＊審査会候補の作品について

〈褒賞〉
書道芸術院大賞（1名）
書道芸術院準大賞

白雪紅梅賞（各部を通して5名）
その他、同候補となった作品については昨年と同様「書道芸術院俊英賞」とする。

○選考委員は運営委員（財団理事・監事）が担当。

＊無鑑査の作品について

院賞、毎日新聞社賞、特選、秀作とする。

○審査員

漢字部 主任 中尾琴麗はじめ10名
かな部 主任 勝山初美はじめ5名
現代詩文書部 主任 佐久間幸扇はじめ7名

篆刻・刻字部

主任 小林古径はじめ2名
前衛書部 主任 工藤永翠はじめ7名

○審査事務委員

漢字部 主任 朝倉希代子はじめ9名
かな部 主任 藤原三枝子はじめ3名
現代詩文書部 主任 佐藤初香はじめ6名
篆刻・刻字部 主任 加藤暢流はじめ2名

前衛書部

主任 佐々木青霞はじめ8名

＊一般公募の作品について

〈褒賞〉
入選作品のなかから審査して、準特選、佳作、褒状を与える。

○審査員

漢字部 主任 一谷春窓はじめ7名
かな部 主任 無鑑査審査員と兼任
現代詩文書部 主任 菊池實美子はじめ6名

篆刻・刻字部

主任 無鑑査審査員と兼任
前衛書部 主任 無鑑査審査員と兼任

○審査事務委員

漢字部 主任 三浦鄭街はじめ6名
かな部 主任 無鑑査審査事務委員と兼任
現代詩文書部 主任 江本興舟はじめ5名

篆刻・刻字部

主任 無鑑査審査事務委員と兼任
前衛書部 主任 無鑑査審査事務委員と兼任

○実行委員会

第78回書道芸術院展 実行委員会を開催。併催の第76回学生展についても同様。

○第78回書道芸術院展作品搬入

・一般公募出品数 415点 昨年は37点減
・無鑑査出品数 643点 昨年は14点減
・審査会候補出品数 590点 昨年は28点減
・審査会出品数 515点 昨年と同数

○鑑別・審査

一般公募と無鑑査作品の鑑別・審査が、令和6年12月7日共和会館に於いて行われ、漢字部と現代詩文書部は8日が残務となった。少数でのスタッフ体制であったが、手際よく運営され、無事終了できた。

○無鑑査に対する賞

院賞9点（漢4、かな1、現詩3、前衛1）
毎日新聞社賞4点
特選72点
秀作175点を決定 入賞率40%

○一般公募に対する賞

準特選30点（漢13、かな3、現詩9、篆刻・刻字1、前衛4）
佳作83点
褒状135点
入選167点を決定 入賞率60%

○審査会候補に対する特別賞選考

令和7年1月28日 東京都美術館地下審査室
令和7年1月29日 東京都美術館地下審査室

○審査会員に対する特別賞選考

令和7年1月28日 東京都美術館地下審査室
令和7年1月29日 東京都美術館地下審査室

○審査会員に対する特別賞選考

令和7年1月28日 東京都美術館地下審査室
令和7年1月29日 東京都美術館地下審査室

今回は、選考委員（院理事・監事）全員出席のもと、審査会候補及び審査会員に対する賞の審査を部門ごとに行い、選出された入賞候補の作品を従来のように全員の投票による審査という形で行った。最終決定は、運営委員長、常務理事3名に一任していただき、運営委員の承認を得て決定した。各賞及び秋季展などの出品者選考なども同様に行った。

その結果書道芸術院大賞に、かな部・菅原澤花さん（宮城県）、

書道芸術院準大賞5点
（漢2、かな1、現詩2）

白雪紅梅賞10点
（漢4、現詩4、前衛2）

書道芸術院俊英賞43点を決定。
春華賞はかな部・熊谷 翔さん（埼玉県）、となった。

○第76回全国学生書道展

第76回全国学生書道展には北海道から九州まで全国から作品が寄せられ、令和6年10月23日締め切った。出品点数は、半紙の部が966点。半切1/2の部265点。

審査は令和6年10月30日～11月4日にかけて、A賞審査員6名、A賞選考委員9名、中央審査員17名によって行われた。優秀作品が多く、一作一作に時間をかけて審査。

その結果、全国学生書道展大賞に半紙の部7点、半切1/2の部4点、準大賞に半紙の部15点、半切1/2の部8点選ばれた。なお、上位入賞者の作品と個人賞の氏名、団体賞については、第76回全国学生書道展成績表冊子に掲載された。都美術館では見応えのある作品が地区別に展示され、熱気あふれる展示となった。

○陳列部
2月4日、三浦鄭街陳列部長のもと、院展、学生展、指導者作品展を含む計529点という膨大な数の作品展示を行う。

今回も、陳列部員を中心に、作業にあたる人員を少なくして陳列業者（川端商会）に作業員の増員をお願いした。

○記者会見
毎日新聞社ほか報道関係、評論家

の方々にお集まりいただき、運営委員長・実行委員長による展覧会概要、審査部長による審査報告、常務理事による学生展概要の説明が行われた。

○評論家の眼

大東文化大学文学部准教授の高橋利郎様、毎日書道会理事・創玄書道会会長の室井玄鸞様に依頼、作品評価をいただいた。批評は作品脇に掲示し、さらに印刷して参観者にも配布した。

○「高橋利郎」の眼

桐岡銘紀、坂本大龍、鈴木智翠、工藤永翠、見越雪枝の各氏。

○「室井玄鸞」の眼

大平昌峰、崎井恵風、森田藤谷、井上恵子、古谷天岳、坂本龍水の各氏。

○選考委員注目作

今回初の試みとして選考委員注目作を選定した。

○「書道芸術院前衛書展」出品者の軌跡

昨年秋季展併催としてアートサロン毎日で開催した企画展は、その後の作家の足跡として、会場内に集約して陳列した。

○作品解説会

2月9日11時から前衛書展出品者の作品解説会（研究会）、14時から無鑑査・一般の解説会を会場で各部署ごとに分かれて行った。2月11日10時30分から役員作品、大作作品の作品解説会を行った。

○席上揮毫会（院展）

2月9日10時から、今回初の試みとして大賞、準大賞受賞者による会場内での作品揮毫会を行った。

（準大賞5名）
○全国学生展大賞受賞者による席上揮毫会
2月8日、午前10時より開催。全国から大賞受賞者が集い、敏腕を振るっていただき、会場を盛り上げてくれた。最高賞の受賞者だけあって堂々たる揮毫ぶりに会場が緊張感に包まれ、固唾を呑んで見守った。賞にふさわしい立派な揮毫会となった。

○ワークショップ

2月9日13時から企画委員が中心となり、学生展の会場にてカレンダー作りの内容で実施した。

○全国学生書道展表彰式

2月8日、揮毫会の後13時より、上野精養軒において、毎日新聞社事業本部文化事業部長南敦子様をお迎えして表彰式を挙行了した。

表彰状授与は、下谷洋子運営委員長をはじめ財団理事・監事が務めた。毎日小学生新聞賞、毎日新聞社賞については南敦子様にお願いした。

○書道芸術院展表彰式

学生展表彰式に続いて15時30分より、同会場にて、書道芸術院展の表彰式が挙行された。

ご来賓は、毎日書道会総務部企画部長竹下享子様をお迎えした。

春華賞、大賞、準大賞は下谷洋子運営委員長より授与。以下の賞については、財団理事・監事により授与。ご来賓の竹下享子様には毎日新聞社賞の授与とともに激励のご祝辞をいただいた。

最後に受賞者を代表して、書道芸術院大賞に輝いた菅原澤花さんから

の謝辞があった。

○祝賀懇親会

2月8日17時30分から上野精養軒において5年ぶりの開催となった。

○総務部

学生展、院展とも総務部は、書類搬入から作品搬入、整理、審査準備、陳列準備、撤回、搬出まで、都丸みどり、藤村昌子、お二人の部長には、長期にわたりご苦労願った。

○審査部

学生展は半田藤扇審査部長、院展は山口仙草審査部長のもと、事務局、総務部と連携し、審査、事務処理ともに順調に進めていただいた。

○会計部

会計部は院展と学生展全てにわたり、滞りなく処理していただき、事業終了後の残務も含め、近藤尚子会計部長に感謝。

○運営事務局

今回は新型コロナウイルス終息後の開催となったが、審査の運営や表彰式・祝賀会会場の変更、そして新たな試みの実施など、院展、学生展を通じて、運営事務局には、多大なご苦労をおかけした。また、各部の当番審査員並びに事務委員の人数割り出しをはじめとした各種業務を各部署と連携して事務処理にあたっていただいた。片岡豪峰事務局長・佐藤菜扇・大内熒軒両事務局次長には、深く感謝申し上げます。



表彰式（大賞授与）



作品研究会

真草千字文② (智永)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨(押印のみ可)

漢字研究部臨書課題
特別研究部臨書課題

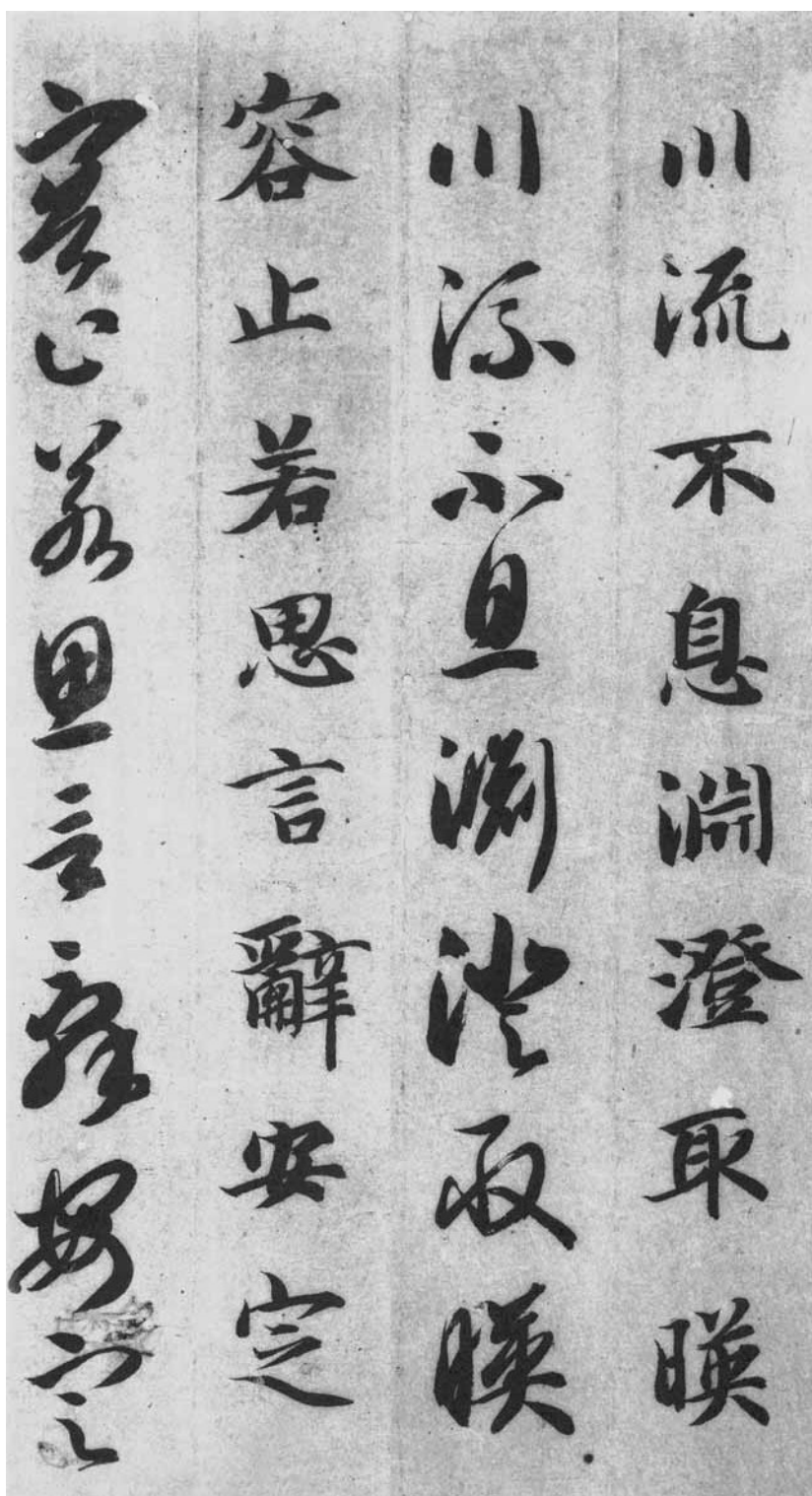
Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

Ⅱ (A 大作の部 毎百展覧会・倉サイズ以内、2×6尺、紙も) 当該古典の左記掲載部分以外も可。
(B 小品の部 半切以上半切以内、紙サイズも) (A・B 縦書き)

〈解説〉千字文とは1000字の異なった文字を集めて、1字も重複しない250句の四言句にまとめたものである。梁の武帝(502〜550年)が周興嗣に命じて作らせた四言古詩であり、識字や習字の教材として用いられた。日本で言えば「いろは歌」のようなものである。

智永の生没年は不明であるが、隋代(581〜618年)を生きた人であり、次の唐時代に完成期を迎える楷書の、その直前の姿を示す貴重な資料と言える。隋代の楷書は墓誌銘が重要視されるが、石ではなく紙に書かれた姿を我々に生々しく見せてくれている。

(編集部)



※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています。

川流不息。淵澄取映。／容止若思。言辭安定。

※作品制作の方法は①楷書のみ②草書のみ③楷書と対応する草書 のどれかとする。

古筆鑑賞

(254)

元永本古今集

(伝源俊頼筆)

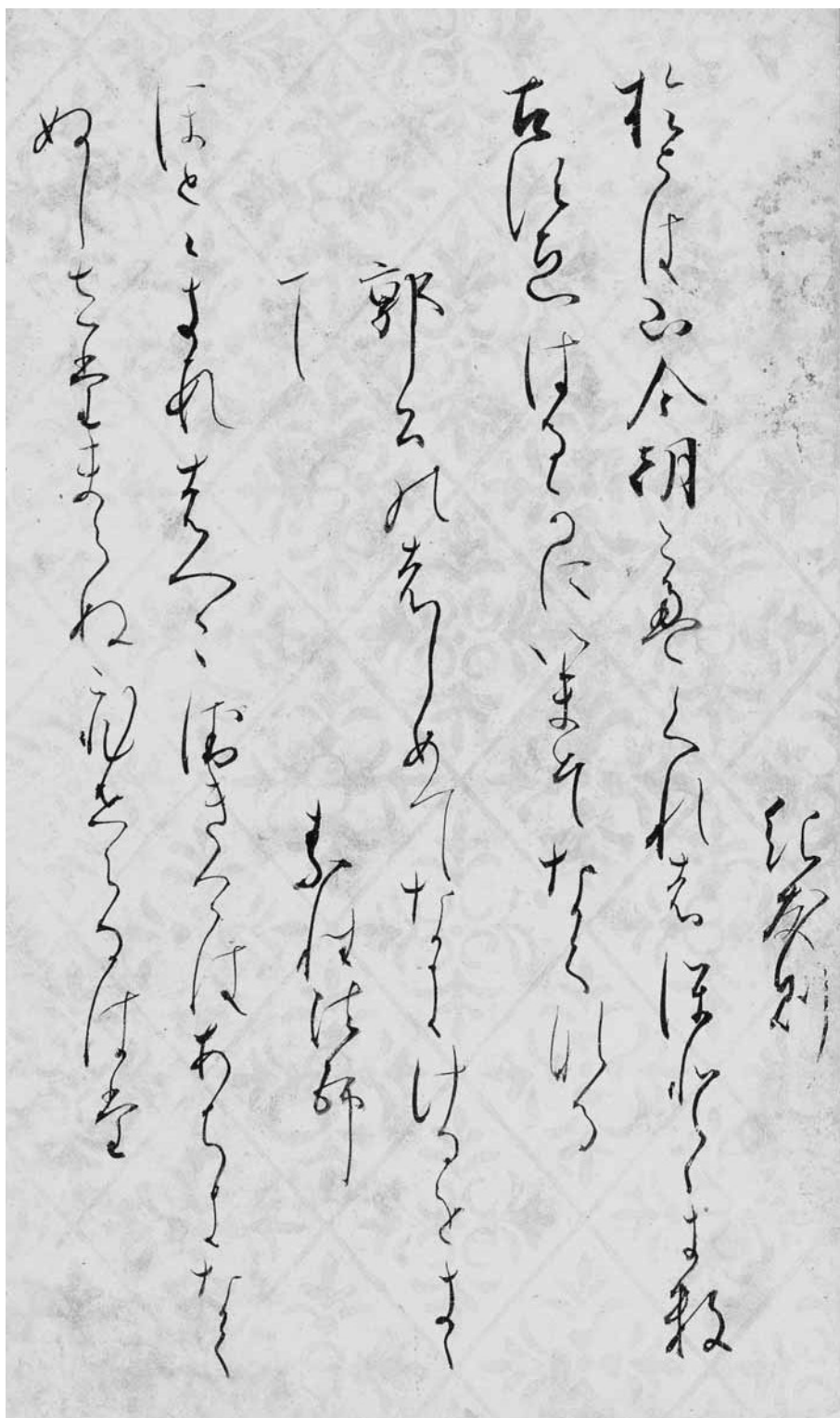
②

〔解説〕この古筆の名称は、上巻末尾に「元永三年七月廿四日」とあることによる。この年(1120年)の約30年後に保元の乱が起こる。したがって、武士の時代が始まる前の、王朝文化の最後の華のひとつがこの古筆ということになる。

「元永本」の書風についてのコメントを紹介する。

・しゃれた書きぶりです。すっきりしています。(略)連綿も縦へ縦へと伸びています。紙面構成が明るく、たいへん軽快です。…村上翠亭・すっきりした繊細な線が目につきますが、よくみると千変万化で非常に厚みのある男性的な部分もあります。…榎倉香邨

(編集部)



(東京国立博物館蔵)

※掲載図版原寸

※古筆は原寸(以上も可)で臨書しましょう。

かな研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)

特別研究部臨書課題

A. 大作の部=毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
B. 小品の部=半切 $\frac{1}{2}$ 以上、半切以内(縦横自由)
<いずれも上記の掲載以外も可。>

〔よみ〕紀友則／おとは山今朝こえくればほとゝぎす／こずゑはるかにいまぞなくなる／郭公のはじめてなきけるをきく／て素性法師／ほとゝぎす
はつこゑきけばあぢきなく／ぬしさだまらぬこひせらるはた

得失還空

よみ (得失空に還る)



書体 自由

習い方解説 (2)

小竹石雲

得失還空

(得失空に還る)

(十牛図)

得たものも失ったものも空に帰する、の意。この世のすべては因縁によって生じたものであり、実体がないということ。

自己表現の根底には古典臨書が必須である。運筆、用筆といった技術の修得を図ることは言うまでもないが、古典から発する高雅な香りを自身の体内に取りこみ創作に生かせることが臨書学習の最大の目標だろうと思う。一歩前進するときの手がかりになる。

今月は長鋒と短鋒を使って書き分けてみた。力むことなく緊張感を持って書くことができたように思う。

- ・長鋒…伸びやかさ
- ・短鋒…迫力表現

〈参考〉短鋒使用の作



漢字規定 秀級以下 【6月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

坂本素雪選書

習い方解説 (2)

坂本素雪

年豊人樂 (朱熹)

(年豊人樂しむ)

豊作や稔りがよく、人々が樂しむ。

言葉に重点を置き選定した語句でしたが、何とも収まりの悪く、書き難い字形ばかりかと反省している。

「年」：縦長の感じで、虞世南の孔子廟堂碑みたいになってしまったので、それより線質は少し柔らかくした。

「豊」：上部の曲は豊かさを出すために円みをつけた。下部の豆の収筆を強くしっかりと引き、この字を纏める。

「人」：これは画数が少なく2画で収めなければならないので、1画目を左上部にして2画目の収筆をしっかりと安定させる。品格を求めた結果が九成宮禮泉銘の字形になってしまった。しかし結果良しとする。

「樂」：上部に画数が多い字形。過密にならないように注意し、下部を太くしてバランスを取る。

年豊人樂

素雪書

年豊人樂

よみ

(年豊人樂しむ)

書体Ⅱ楷書

かな規定 初段以上 【6月15日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書

習い方解説 (2)

平川峰子

雲の峰幾つ崩て月の山

（松尾芭蕉）

芭蕉が元禄2年月山をよんだ句。「月の山」は、月山と月の照る山の意をかけた。入道雲が夕方になって次々と崩れ、やがて月の清光をあびる月の山となったの意。

俳句を作品に制作する時、なるべく変体がなを少なくするように思っています。今回はあえて変体がなを多く使用してみました。

くが三つ、つが三つ入った句です。ので変体がなを字典で調べていろいろ入れ替えてみてください。

俳句作品は字数が少ない分、余白が多くなりますので最初に構成を考え、墨継ぎの字（この場合は徒）の位置を考えてください。

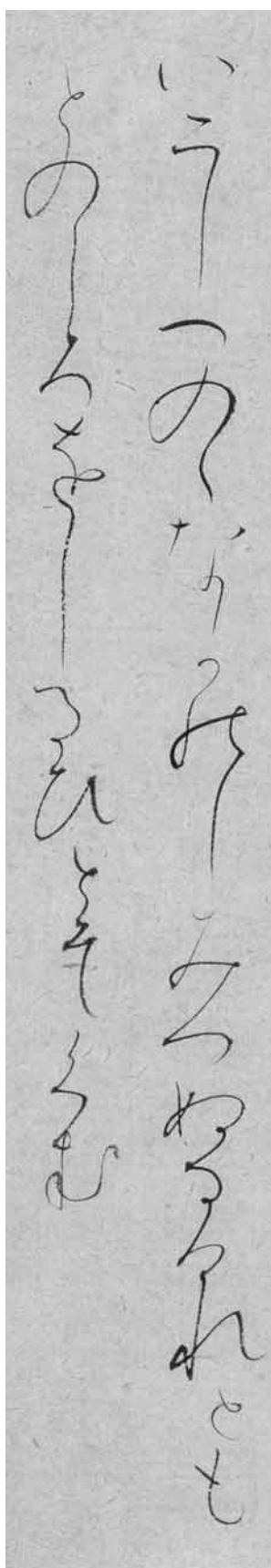
字数が少なくても行のゆらぎで、おもしろい作品ができると思います。

よみ方 雲（久母）の峰（美年）幾（以久）つ（川）崩（俱川礼）て月（徒支）の（豊山）やま

創作

*料紙は半紙版（33.0×24.5cm）を使用しましょう。半懷紙は上記のサイズに切って下さい。

かな規定 秀級以下 【6月15日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)
掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。粘葉本和漢朗詠集(掲載写真拡大120%)



よみ方 いにしへのなかなのしみづぬるけれども
とのころをしるひとぞくむ

歌意 昔からある野中の清水はぬるいけれど、もともと良い水だと知っている私は汲んでいます。
(あの人は今でこそ疎遠になってしまいましたが、昔のよしみを思い出して訪ねて行くのですよ。)

かな条幅規定 【6月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切(料紙可)

須田清子選書



よみ方

あしびき(足引)の山(や万吹の(能)花(者那)散(遅)りに(二)け(介)り(李)
井手のかは(者)づ(徒)は(八)今(以万)や鳴く(久)らむ(无)

創作

※ヨコ形式に限る

出品券
貼付位置

習い方解説 (2)

須田清子

あしびきの山吹の花散りにけり
井手のかはづは今や鳴くらむ

(藤原興風「新古今集」)

山吹の花は散ってしまったこと
だ。井手の玉川のかじかは、今鳴
いていることだろう。

横作品ですから、全体的に立体
感を出すために書き出しは1文字
下げ、中ほどの介(け)李(り)で文
字を大きくし、振幅の効果もねら
いました。井で墨継ぎしました。

漢字条幅規定 初段以上 【6月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

半田 藤扇 選書

習い方解説 (2)

半田 藤扇

横形式作品は、どこに盛り上がりを出すか？ また、起承転結をどのように収めるか？ 文字の造形・振幅・線の響きあいは、筆者の呼吸が表れます。スタートから心とぎれず、一気通貫した流麗な筆さばきを期待します。

試行錯誤しながら挑戦してみてください。

※ヨコ形式に限る

漢字条幅規定 秀級以下 【6月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

西川 翠嵐 選書

習い方解説 (2)

西川 翠嵐

一池春水緑於苔 (王安国)
(一池の春水 苔よりも緑なり)

書体Ⅱ自由

一池春水緑於苔

翠嵐

書体Ⅱ自由

出品券
貼付位置

今月は半切に行書での一行書です。大きめの筆でゆったりと書いて下さい。起筆で紙に筆がくい込むように、転折は一息入れて筆圧はいったんゆるめてまた筆を上げます。文字の大小を考え中心をそろえるよう気をつけます。天地の余白も考えながら行全体に気を配り一字一字がバラバラにならないよう取り組んで下さい。

人の気持ちを伝えるのに、

大和言葉は最適です。

大和言葉は日本に古くから

根づいてきた言葉。つかい方し

だいで微妙なニュアンスを伝え

る、とがでるからです。琴水書

書体＝自由

◇用紙 ハガキ大(14.8×10 cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(ハガキ大14.8×10 cm)を守って下さい。

習い方解説 (2)

小林琴水

気持ちを伝える大和言葉

首ったけ(夢中になる)

そこはかとなく(なんとなく)

おもはゆい(恥ずかしい)

あばたもえくぼ(恋は盲目)

決まりが悪い(恥ずかしい)

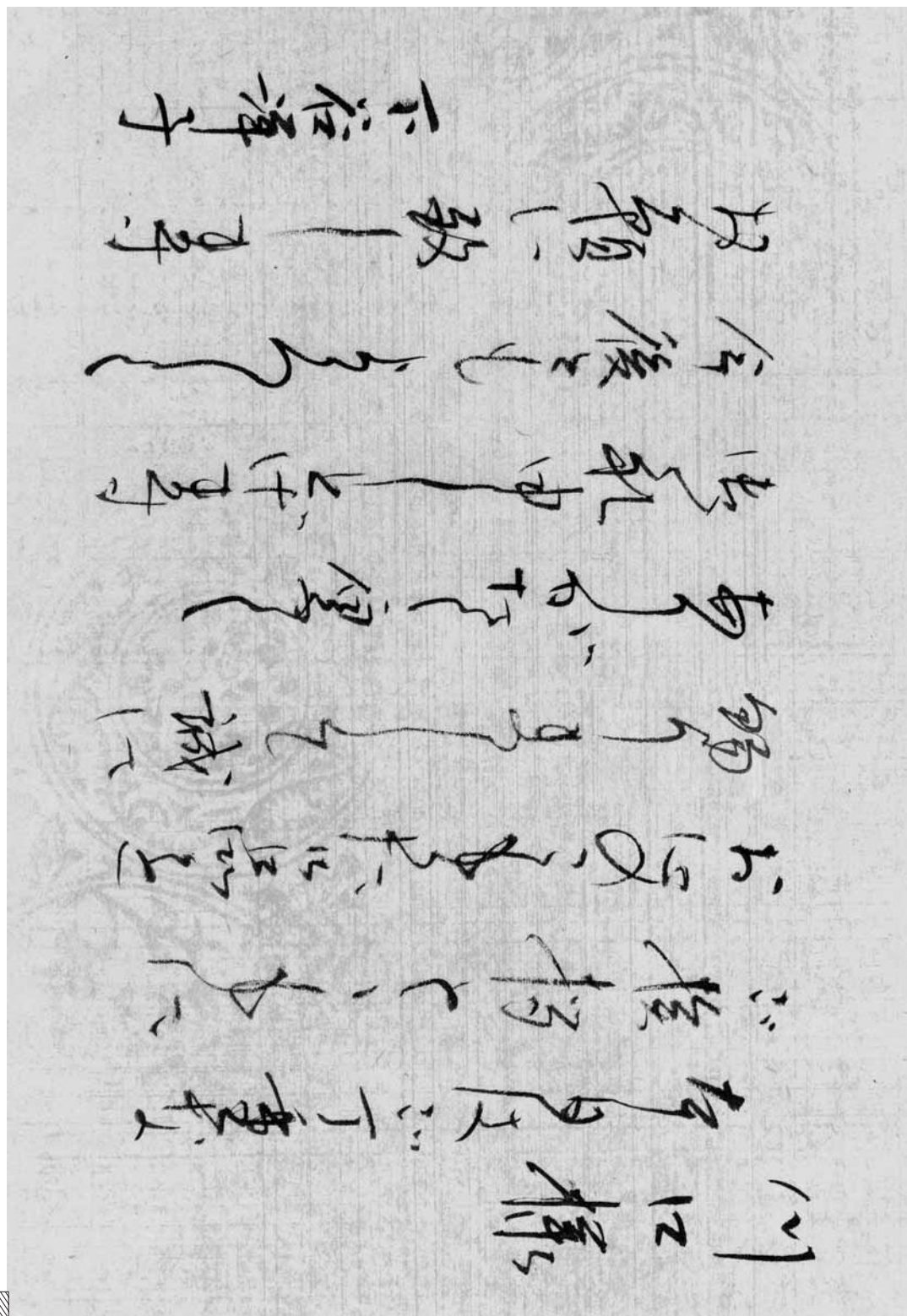
やるせない(気持ちをどうしてよいかわか

らない)

胸をなでおろす(安心する)

ひとかたならぬ(たいへんな)

人の気持ちを伝えるのに、
大和言葉は最適です。
大和言葉は日本に古くから
根づいてきた言葉。つかい方し
だいで微妙なニュアンスを伝え
ることがでるからです。〇〇書



書体=自由

(掲載手本85%に縮小)

川口様／本日はご丁寧な／ご挨拶とともに／お心のこもった御品を／賜りまして誠に／
ありがたく厚く／御礼申し上げます／今後ともよろしく／お願い致します／氏名

※出品券貼付位置↓



- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓名(号)を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る (今月は1行目の下になります)

ペン字部 師範 樋泉 雪簗

温雅でしなやかな線質が魅力。一貫した流れの中に、のどかな情景が浮かぶ、品格あふれる作品。

◎ペン字部総評 行書は特に漢字とかなのバランスに留意することが大事。それによって行間が動き、流れが生まれます。

(孝子評)

かな条幅部 四段 松本 恵泉

構成としてはかな的で面白い。主たる行は筆毛の開閉も切れよくリズムも佳。後半少々荒く残念。

◎かな条幅部総評 慣れない人は

手本に忠実でもよいからかな条幅としてのリズムを学びたい。オリジナルはその後にも

(洋子評)

かな部 師範 名取 美袖

参考手本に正しく向きあって練習した成果が出ています。リズムある線と流麗な連綿が美しい。

◎かな部総評 潤渾のバランスが良い作品が多く完成度が高い。文字の配置も良く美しい散らし作品が多く好感が持てた。

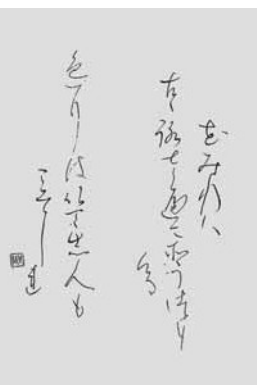
(峰子評)

漢字部 師範 西銘 四章

堂々とした横綱相撲の作。小手先の動きにならず、腰を据えての動きは安定感抜群で力漲る作。

◎漢字部総評 行草作が多かった。表情の多彩さもあって楽しく拝見できた。リズム、テンポが変われば字形も変わる。

(石雲評)



漢字条幅部 師範 青木 藤達

切れ味鋭い線で爽快な行草書。大小、疎密、曲直、潤渾の変化とバランスが良い。熟達の快作。

◎漢字条幅部総評 上級は優れた

行草書作品が多見。線質の良否で評価は分かれる。日頃の鍛錬が大切です。

(萬城評)



現代詩文書部 特選 鷺山 美梢

筆の開閉や遅速の妙が全体をひきだしています。洗練された運筆でしっとりした作品に感じます。

◎現代詩文書部総評 斬新な取組

も散見。一つにこだわらず新鮮な気持ちで。

(無極評)

前衛書部 特選 波多 祥丹

鋭い細線が、全体を引き締めて紙面が明るく爽快な作品に仕上がった。

◎前衛書部総評 文字の形にこだ

わらず、自分の思うままに筆を進めて下さい。

(仙岳評)



惠津子 技法による巧美、造形良
富士子 大胆に表現、軽快な作
楊風 バランスよく豊かな表現力
美佐子 渴筆の構図、練度高い作
菜園 墨色豊かで明快な良作
雅悠 淡墨によるリズム安定作
徳子 弾力的な力強い筆運び良
加奈子 味わい深い心に残る作品
柳明 曲線、直線の運筆見事
美紀 作品構成楽しそうな力作

選評 大石仙岳

絢水 横線の響きが心地よい
登志子 淡々とした文字群良作
和香 大小潤渴の変化が妙趣
雅芳 縦への渴筆が紙面に響く
雅邦 大胆な構成、線の対比佳
麗流 線のにじみが効果的
翠苑 豊潤な線と渴筆に魅力
李花 温雅な淡墨作で渴筆も秀
麗 素朴な運筆が魅了する
流 渴筆中心で切り込む線佳

玉泉 線のにじみが効果的
彩苑 豊潤な線と渴筆に魅力
李花 温雅な淡墨作で渴筆も秀
麗 素朴な運筆が魅了する
流 渴筆中心で切り込む線佳
舞夢 突いた起筆が運筆に融合
蒼媛 目を引き構成で趣きあり
香硯 曲直の線バランスに魅力

邦雲 表情豊かな文字が秀逸
和香 ほんわかする作風佳
英樹 大らかさに潤渴の妙あり
藤象 細線が生きる文字構成
芳博 文字の黒が迫る作品

選評 佐藤無極

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 下谷洋子 種谷萬城 山口仙草 田村鄭雲

小品の部

臨書 (蓮紅) 本田美雪 「寸松庵色紙」

前衛書 (秀水)

坂井初江

「熾」



坂井初江書

135×35cm

◆上下直線構成の作で墨色もよく紙面全体にリズムが感じられる。全体的にもう少し線の強弱がほしかった。

(仙草評)

岩上郁子臨



135×35cm

臨書

(高真)

岩上郁子

「金文(號季子白盤)」

かな (創珠) 阿部珠翠
「古今集より」



50×98cm

◆作品として必要な、気の勢いを感じる作。大小、緩急をつけた行の動きが巧みで、最後の終わり方もモダン。この料紙には少々墨が濃く残念！

(洋子評)

◆藏鋒、中鋒の筆法を着実に用いて、線に深味があり、のびやか。字形も均斉がとれ、安定している。真摯で正確な臨書態度に好感が持てる。

(萬城評)

総出品点数
72点

〈小品の部〉

創作の部(37点)

漢字—8点

かな—3点

現代—1点

篆刻—1点

前衛—6点

臨書の部(35点)

漢字—31点

かな—4点

〈特選候補者〉

(創作の部)

「漢字」

水茎 高岡 秀汀

麗澤 長谷川 翠

翠柳 加藤 紫翠

「現代詩」

宗苑 白井 真理

青蓮 小野 朱星

植松 梅田 紅雨

蒼風 笹木 蒼風

粹仙 藤井 龍仙

千葉 竹浪 叙舟

青湖 北嶋 菁湖

「前衛」

華芳 庄司 紫千

「漢字」

華祥 岩淵 俊雄

澄春 土屋 恵仙

澄春 新行 内芳蘭

大雲 名取 美紬

京橋 豊嶋 晴勝

千葉 石川 晴洞

八街 十河 春景

華祥 板垣 春鳳

東総 薄田 春緑

華祥 板垣 春鳳

大作の部

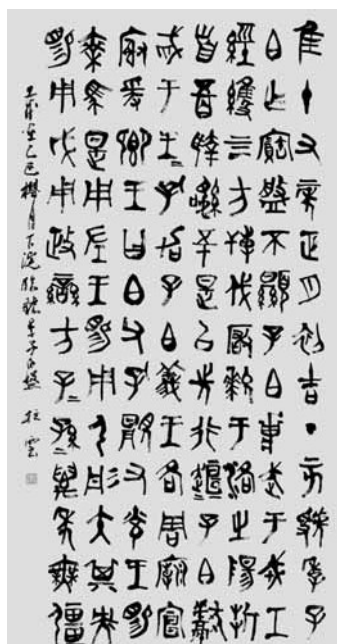


市川紫泉書

60×180cm

◆一文字ごとに丁寧な情感を含め、大きな呼吸の響きが伝わる。余白を大胆に開けているが、線質と字形の変化で緊張感が漂う。
(鄭雲評)

臨書 (千葉)
渡辺柱雲
「金文(號季子白盤)」



渡辺柱雲臨

135×70cm

◆一点一画を大切に臨書し、一貫性がある。筆で書かれた線の表情も少々加味したことで、「金石の気」が加わり趣きが生まれた。
(萬城評)



青木藤漣書

176×57cm

◆2本の筆を巧妙に使い、線質に独特の表情を持たせ味わい深い。字形は無理なく自然で品性も高い。熟達の花が光る。
(萬城評)

漢字 (もくせい) 青木藤漣「宿石邑山中」



三浦朱鳳書

180×60cm

◆作品全体が躍動感に溢れ、雄大なエネルギーを感じる作品です。潤・渴の変化もあり、魅力的で感動を呼び起こされた。
(仙草評)

前衛書 (篤信) 三浦朱鳳「息吹」

大作の部

創作の部(34点)

漢字 6点

かな 8点

現代 6点

前衛 14点

臨書の部(16点)

漢字 14点

かな 2点

総出品点数 50点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕 青連大町 菜園

八街新村 翠芳

〔かな〕 奥田小林 溪姫

水荃清水 蘭舟

伊田鈴木 英晴

〔現代詩〕 伊田鈴木 英晴

四枝奥川 藤象

翠苑佐々木 豊苑

〔前衛〕 紅瑤井田 弘子

一弦井田 明子

大拙道塚 紫音

月華佐藤 陽子

容洲中塩 朱華

〔臨書の部〕 容洲中塩 朱華

〔漢字〕 大雲宮原 香扇

若葉工藤 房

千葉平野 笛舟

遊山江本 興舟

素雪紺野 遊山

上泉早部 朗

漢字研究部 (金文)

選評 児玉 頼 光

今月のホープ作品



酒 井 如 雲

漢字研究部 特選 酒 井 如 雲

紙面の白と黒のバランスがとれ、落ち着いた作。筆先の弾力が活き、丸味と厳しさを表現し、かつ温かさを醸し出している素晴らしい臨書です。字形も古典に忠実で親しみが持てます。落款印にも気を配るよう望みます。

◎漢字研究部総評

古典の特徴を捉えた作もあるが、用紙の大きさを加味せず、大きく荒っぽい作も多く、基本的な筆遣いに欠け、非常に残念な気持ち

です。古典を臨書する際、気をつけることは、

- ①原本どおりに形臨をする。
- ②その古典の特徴を理解する。
- ③筆遣い特に起筆、送筆等を正確に身につけるために具体的な指導を受ける。
- ④添削だけでなく、実際に書いている姿を見てもらう。

⑤一つの古典を半年位続け全臨を何回もする。こうすればきつと書く楽しさがやってきますよ。



舟 進
梅 香
俊 恵
文 美



智 嘉
祐 子
陽 子
明 美
松 雲
映 紅



谿 白
白 慧
智 舟
沙 子
衣 江
和 楓
美 子



珠 英
春 雪
泉 華
七 生
輝 峰

審査会員の部 結果発表 (出品数 漢字30点・かな14点)

選評 小竹石雲・平川 峰子

漢字秀逸作



大鹿 洋江



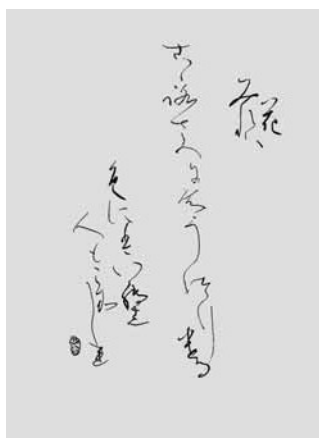
青木 藤漣



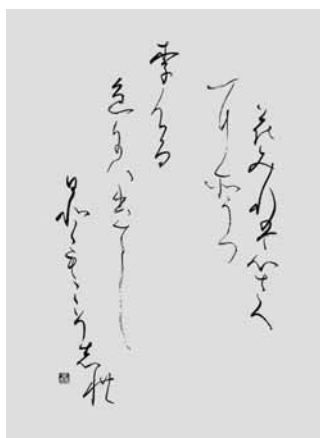
竹浪 叙舟



板橋 雅邦



清水 蘭舟



佐藤 一義

〈次点・50音順〉

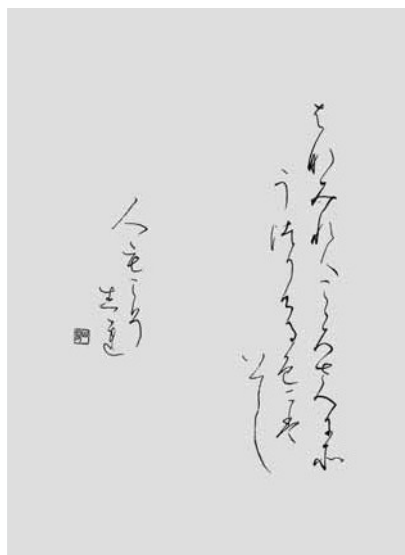
江本 興舟



瀟洒な線に、ほどよい大きさとで書かれ、高雅な作品に仕上がる。運筆の軽妙さの中に、筋金の通った厳しい線は、周囲の余白に輝きを見せてすばらしい。

(石雲評)

かな秀逸作



工藤 山房

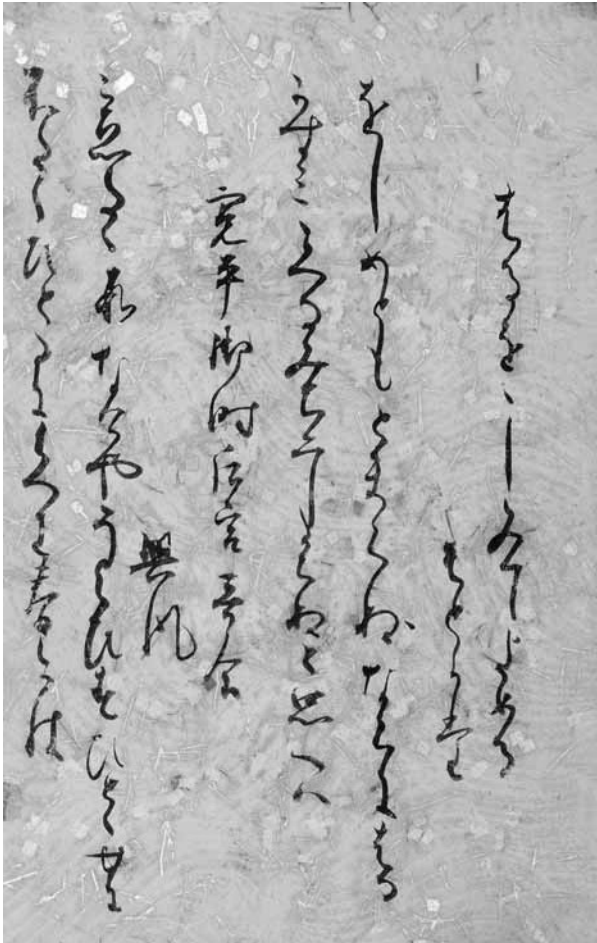
清楚な雰囲気醸し出し作品全体を上品に仕上げています。優しい線条の中にも筆先の動きにメリハリをつけて要所要所を押さえ見事な作です。

(峰子評)

古筆鑑賞

255

元永本古今集 (伝 源俊頼筆) ③



(掲載図版・70%に縮小)

〈よみ〉
 はるをくしみてよめる
 もとかた
 をしめどもと(一)まらぬなくにはる
 がすみかへるみちにしたちぬと思へば
 寛平御時后宮哥合
 興風
 こゑたゝずなけやうぐひすひとせに
 ふたゝびとだにくべき春かは

古典鑑賞

481

真草千字文 ③ (智永)



(掲載図版・70%に縮小)

孔懷兄弟。同氣連枝。
 交友投分。切磨箴規。

佐藤華炎書展

小高へ —For Odaka—



2025 年 5 月 11 日（日）—25 日（日）

（開館は基本的には 12:00～16:00 ですが HP でご確認ください）

場所：おれたちの伝承館 福島県南相馬市小高区南町 2-23

ワークショップも開催しますが、詳細はホームページをご確認ください。

HP： <https://suzyj1966.wixsite.com/moyai/schedule>



第64回 黒潮書展

●会期 令和 7 年 6 月 20 日（金）
～ 6 月 22 日（日）
午前 10 時～午後 5 時
（最終日は午後 4 時まで）

●会場 八戸市美術館
〒031-0031
青森県八戸市大字番町 10-4
TEL 0178-45-8338

●主催 黒潮書道会（会長）石田和子

●後援 （公財）書道芸術院・（一財）
毎日書道会・（一財）東奥日
報文化財団・（株）東奥日報社・
（株）デーリー東北新聞社・青
森朝日放送（株）

書 展

第58回

玉松会書展

山口仙草

会期 令和 7 年 4 月 8 日（火）
～ 13 日（日）

会場 鳩居堂画廊

ソメイヨシノが満開の中、花の香りをかぎながら銀座の鳩居堂画廊で開催されている第58回玉松会書展に伺った。

玉松会は本年より会長が平川峰子先生から小島孝予先生に引き継がれ、新体制のもとで今回展の開催となった。

昨年と同様に作品のテーマや課題は決めず、各自が思いのままにかなの世界を展開していた。新たに顧問になられた石井・平川先生をはじめ、幹部の方の作は充実しており、また、会員の作品も自由で安定したものが多く、それぞれの日頃の真摯な取り組みが感じられた。会場の奥には、故・永井幸子初代会長の遺作「会津八一のうた」が飾られており、皆を暖かく迎えているのが印象的であった。

3階と4階および2階の踊り場に飾られた62点の作品が、新生・玉松会の今を力強く表していた。若い力を伸ば

しながら益々のご発展と隆盛を心より
祈念申し上げ、報告と致します。



華やかな会場風景

767号篆刻優秀作品

選評 後藤 大峰

今月の注目作
逢沢 唯一

募刻特選 小沢 華仙

「狗子」



細部までよく観察されています。運力も確実で切れが素晴らしい。

創作特選 平塚 由香

「感恩戴徳」



構成の佳さが目に付きました。何よりも線質が群を抜いている。

◎篆刻部総評

今回は創作に作品の佳いものが見られました。今回にて、このような形での作品募集は終了です。多くの作品の応募に感謝致します。
(大峰評)

(摹刻)

特選 大雲 小沢 華仙

秀作(60書簡) 蒼山 美梢

蒼原 庄司 櫻空

石心 成田 能喜

佳作(60書簡) 八街 小菅 法子

遊雲 中川 研治

生大 吉原 進

入選(60書簡) 丸山 加藤 妙子

(選外なし)

(創作)

特選 白琉 平塚 由香

秀作(60書簡) 唯一 逢沢 唯一

蒼原 庄司 櫻空

石心 成田 能喜

佳作(60書簡) 八街 小菅 法子

遊雲 中川 研治

生大 吉原 進

入選(60書簡) 丸山 加藤 妙子

(選外なし)

今月の注目作

庄司 櫻空

「狗子」



「唯」



中島 義則

「桃紅復含宿雨」



新村 翠芳

「櫻雲」



◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

電話(03)3862-1954

FAX(03)3862-1957

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時の間に
お願いいたします。(土日祝日は休み)

送料

1か月の購読部数が

1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上は	送料免除

令和七年 四月二十五日印刷
令和七年 五月一日発行

定価 1部 七五〇円

編集兼 下谷 洋子
発行人

印刷 株式会社 リンクス
小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

電話(03)3862-1195
FAX(03)3862-1195
振替 0015014135058
http://www.shinsei.co.jp/shogi/